慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	台湾キリスト教の歴史的展開 : プロテスタント教会を中心に
Sub Title	Development of Christianity in Taiwan : focus on the Protestant Churches
Author	藤野, 陽平(Fujino, Yohei)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2008
Jtitle	哲學 No.119 (2008. 3) ,p.295- 336
JaLC DOI	
Abstract	A study of Christianity that is understood not only from doctrine or theory but also from a social context is needed today. Many studies are being conducted from this point of view as part of a project carried out by the Japanese Association for the Study of Religion and Society. However, most of these studies pertain to Japanese or Korean Christianity. From the East Asian study perspective, there is presently a need for studies on the Chinese people. Therefore, I take Christianity in Taiwan as an example. In 2005, there were some 903,451 Christians in Taiwan. Christianity is secondary to Daoism (about 7,600,000) and Buddhism (about 5,486,000). As of 2007, the population of Taiwan is 22,900,000; therefore, the percentage of Christianity is approximately 4%. The churches that have over 10,000 members are The Presbyterian Church in Taiwan (台灣基督長老教會222,381), Little Flock (召會99,374), True Jesus Church (真耶〓教会70,618), Bread of Life Christian Church in Taipei (台北靈糧堂33,132), Chinese Baptist Convention (中華基督教浸信會聯會26,205), Taiwan Lutheran Church (台灣信義會13,732), and Taiwan Holiness Church (台灣聖教會11,582). So I analyze Christianity in Taiwan, using the Presbyterian Church in Taiwan, Taiwan Holiness Church, True Jesus Church, and Little Flock as examples. I present Christianity for a conclusion that is being constructed in a relation between Taiwanese folk religion and Christianity under the trend of globalization. Moreover, I present a new perspective on the study of religion in Taiwan.
Notes	第2部 民俗宗教から観光研究まで 投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000119-0298

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

投稿論文

台湾キリスト教の歴史的展開

——プロテスタント教会を中心に——

藤　野　陽　平*

Development of Christianity in Taiwan: Focus on the Protestant Churches

Fujino Yohei

A study of Christianity that is understood not only from doctrine or theory but also from a social context is needed today. Many studies are being conducted from this point of view as part of a project carried out by the Japanese Association for the Study of Religion and Society. However, most of these studies pertain to Japanese or Korean Christianity. From the East Asian study perspective, there is presently a need for studies on the Chinese people. Therefore, I take Christianity in Taiwan as an example.

In 2005, there were some 903,451 Christians in Taiwan. Christianity is secondary to Daoism (about 7,600,000) and Buddhism (about 5,486,000). As of 2007, the population of Taiwan is 22,900,000; therefore, the percentage of Christianity is approximately 4%. The churches that have over 10,000 members are The Presbyterian Church in Taiwan (台灣基督長老教會 222,381), Little Flock (召會 99,374), True Jesus Church (真耶穌教会 70,618), Bread of Life Christian Church in Taipei (台北靈糧堂 33,132), Chinese Baptist Convention (中華基督教浸信會聯會 26,205), Taiwan Lutheran Church (台灣信義會 13,732), and Taiwan Holiness Church (台灣聖教會 11,582).

* 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所短期共同研究員

So I analyze Christianity in Taiwan, using the Presbyterian Church in Taiwan, Taiwan Holiness Church, True Jesus Church, and Little Flock as examples. I present Christianity for a conclusion that is being constructed in a relation between Taiwanese folk religion and Christianity under the trend of globalization. Moreover, I present a new perspective on the study of religion in Taiwan.

Key words: Taiwan, Christianity, Protestant, typology of religious societies

1. はじめに　台湾のキリスト教の略史と問題設定

本稿は台湾のキリスト教を社会的文脈の中で再考することを目的とする。現在宗教学や宗教社会学の分野で，それまで普遍宗教として捉えられることが多かったキリスト教を教義・経典・思想だけではなく，現地の社会的文脈に即した形で再考しようという試みは盛んである。例えば日本宗教学会では学会誌『宗教研究』誌上（第337号，2003年）で「『生活の宗教』としてのキリスト教」という特集が組まれ，「宗教と社会」学会でも「日本社会とキリスト教」（1999–2000年），「社会的コンテクストのなかのキリスト教」（2001年より）というプロジェクトで活発な議論が繰り返されている。代表的な業績として，マーク・マリンズは日本で生まれたキリスト教会を土着化の概念から日本社会の文脈に則してその特徴を描いた［マリンズ2005］。池上良正は生きられた宗教として初期ホーリネス教団を民衆キリスト教という概念を用いて分析した［池上2006］。このような研究によって普遍宗教として捉えられてきたキリスト教が社会的文脈の中に位置づけられ，現在ではよりミクロに生きられる宗教として再考されている。現代の宗教を考える上で有効な視点であり，非常に重要な意義を持っている。これらの研究はキリスト教という定数に対して各地のコンテクストは変数にあたるので，より多くの社会の文脈を事例として考察することでより説得力が高まるはずである。しかし，研究の対象とされ

る地域の多くは日本と韓国の事例が占めているのが現状で，変数としての社会的文脈の偏りは否めない。特に現在学会内外でその重要性が高まっている東アジア研究という観点から考えると漢族地域は必要不可欠であろう。そこで本研究では台湾のプロテスタント教会を取り上げる。ただし，台湾のキリスト教は研究の初段階であるので，教団類型を台湾社会の文脈の中から考察し，研究の方向性を提示していきたい。

(1)　日本における台湾のキリスト教研究とその問題点

日本国内での台湾のキリスト教研究は個別の問題意識に対して述べられることが多く，体系立てて議論されてない。概要を述べている鄭児玉の論旨をまとめておく［鄭 1981］。鄭によると (1) 台湾に初めてキリスト教が伝わったのは大航海時代の貿易競争によってである。当時，オランダ改革派教会 (1624–62) とスペインドミニコ宣教団 (1626–42) によって台湾宣教が行われたが，鄭成功の来台 (1661) によって両教派は撤退し，台湾からキリスト教は途絶えた。(2) 再び台湾にキリスト教が伝えられるのはアヘン戦争 (1840–42)，南京条約 (1842) 後における近代化の中で 1865 年のことである。当初は民衆の反発に遭いながらもキリスト教宣教師が活躍し啓蒙活動を行った。(3) 日清戦争 (1894–95) 後の下関条約 (1895) によって台湾は日本に割譲されたが，宣教師らによる文化活動，台南城へ日本軍入城の際に宣教師が日本軍と住民のの仲介したこともあって，当初は日本の総督府とキリスト教は比較的友好的であった。(4) しかし，植民地化でキリスト教は弾圧され，「無慈悲な日本人の植民地支配の下で苦しめられた」［鄭 1981: 99］。(5) 戦後 (1945)「光復」したにもかかわらず，中国大陸の共産化によって流入した「外省人」，本省人は迫害を受けキリスト教も「日本支配下の時よりももっと困難な情勢に直面」［鄭 1981: 99］した。

こういった論調に通底しているのは「台湾のキリスト教史はその悲劇的

な政治史を反映する［鄭 1981: 74］」という歴史観である。これ自体は的を射ている分析であり，歴史研究に関して門外漢である筆者は批判するだけの技量も情報も持ち合わせていないが，長老教会からの視点が強すぎるようである。実際にこれ以外にも日本語で台湾のキリスト教の概要を述べたものは数点あるが［日本基督教団台湾関係委員会編 1984 等］，それらの著者は長老教会や長老教会と協約を結んでいる日本基督教団の関係者がほとんどであって論調はほぼ同じである。本稿では長老教会以外の教派の視点からも考察することで多様な台湾におけるキリスト教のあり方を提示したい。

(2) 台湾におけるキリスト教研究とその問題の所在

プロテスタント諸派を主流派，福音派，聖霊派（ペンテコステ派）と 3 分類することは世界的な傾向をかなりの部分反映しており，学会内でも実際のキリスト教界でも利用されている。主流派とは政治的にリベラルで神学的には近代主義的な傾向が強いグループで，福音派と聖霊派は政治的には保守的で神学的に根本主義的・原理主義的な傾向が強い。特に聖霊派は聖霊の臨在を伴うと一般に「異言」と言われる霊が語らせる言葉などの身体に通常は見られない反応を起こす聖霊充満などと言われる体験を重要視するグループである。日本において主流派は日本キリスト教協議会 (NCC)，福音派は日本福音同盟 (JEA)，聖霊派は日本リバイバル同盟 (NRA) という機構を作っている。

一方，台湾でのキリスト教研究ではプロテスタント諸派を国語教会，台湾語教会，独立教会と分類することがある［査 1996 等］。単純に言って国語教会とは中国語を利用する教派，台湾語教会とは台湾語を利用する教派を指すが，この分類は台湾の歴史・社会的な背景から生まれてきた。国語教会とは 1947 年の 228 事件以降，中国大陸での政局が悪化するのに伴い，「外省人」とともに台湾に渡ってきた教派で，彼らは台湾語が理解

できないために中国語で礼拝する教派が必要となり成立した。当初は国語教会と台湾語教会という壁ができてしまうことなど思いもよらず，単に必要に応じてのものであったようである。しかし，中国語と台湾語という使用言語の違いはそのまま台湾語を理解できない外省人のための国語教会，中国語を理解できない「本省人」のための台湾語教会という住み分けが進むことになった。

なお，外省人とは国共内戦に敗北し台湾に渡ってきた人々を指し，それ以前から台湾に暮らしてきた人々をさして本省人という。共産党に追われ地縁・血縁を失い挫折や困難を味わった外省人にとって宗教への需要は高く，この時期の国語教会は発展している。そして国語教会と台湾語教会への政府の態度は政局に大きく関係していた。蒋介石一家がキリスト教徒であったこともあり，政府高官に国語教会の信者は多かった。また，外省人の多くは共産党から追われてきたために無神論者である中国の共産主義は悪であるとの前提に立っており，彼ら外省人が多く所属する国語教会は国民党から宣教の自由を与えられていた。

一方，台湾が中華民国の支配に入る以前から台湾で活動していた教会は信者が台湾語を使うことが多いので，自然と台湾語教会となっていった。しかし，台湾語教会の指導者たちが台湾人の権利をもとめる活動を行うことで，政府にとって好ましからざる教会となっていった［査 1996，鄭 1981: 110 等］。

独立教会とは様々な文脈で利用される用語である。キリスト教界では母教会から独立して活動している教会という意味で利用されることが多い。文化人類学ではアフリカの事例を中心にキリスト教のミッションに由来するが，徐々にキリスト教の様々な概念が現地の文脈で読み替えられていき，ミッションとの関係を切って，独自の活動を行っている教会を「独立教会」として概念化している［中林 1979, 1994，石井 2007］。

一方，台湾のキリスト教の教団類型としては「一民族，一社会，一地域

内で発生した教会」[李 2001: 108] とされるが，台湾のような多民族・多言語で構成される社会で成立した教会の定義がこれでよいのか甚だ疑問ではある。しかし，本稿は台湾の文脈で理解するということが目的であるので，前2者ではなく台湾での意味に最も近く「海外のミッションなどによらず，台湾・中国で発生・受容されている教会」と定義しておく。いずれにせよ欧米や日本からのミッションとは一線を画し，中国で成立し，台湾で広まった独立教会という区分があること自体は妥当であろうし，漢人社会におけるキリスト教の展開を考える際に良い例となるであろう。

上記が台湾におけるプロテスタント教会の分類である。主流派・福音派・聖霊派という世界的なカテゴリーも有効であるが，上記の国語教会・台湾語教会・独立教会といった台湾独自のカテゴリーも念頭におく必要がある。しかし，この台湾独自のカテゴリーにも問題がある。それは国語教会と台湾語教会とは言語という対立軸がはっきりしているが，それに対して独立教会には中国語を使う教派もあれば，台湾語を利用する教派もあるので，独立教会が前二者に対してどういった位置になるのか曖昧であることである。本稿ではこの台湾のプロテスタント独自の分類を援用しながらも独立教会にはミッション系教会という対立軸を導入することで台湾のキリスト教を考察する上でより有効で現実に即した視座を提出したい。

(3) 対象の選出と記述の方法

本稿では以下，長老教会，聖教会，真耶穌教会，召会というプロテスタントの4教派の初期の指導者に焦点を当て，その特徴を付け加えるという形で考察する。台湾では多くのプロテスタントの教派が活動を行っているが，全てを取り上げることはできないし，筆者自身も全ての教派について情報を持ち合わせているわけではない。そこで本稿では上記の代表的な4教派に対象を絞って取り上げることとする。第一にミッション系台湾語教会の例として長老教会をとりあげる。本教派は台湾最大のプロテスタン

ト教会で，1865年創設，歴史も最長で宗教界のみならず，政治，医療，教育など台湾社会に与えた影響は大きい。第二にミッション系国語教会の例として，聖教会は1926年に台湾に伝えられた。当時，日本から伝わった教派が在台日本人を対象とした中で，台湾人を対象とした数少ない教会であり，台湾社会のキリスト教という意味では取り上げるべき教派である。第三に独立系台湾語教会として1917年に創立した真耶蘇教会を，第四に独立系国語教会の例として1926年に創立した召会を取り上げる。真耶蘇教会と召会は長老教会と併せて台湾のプロテスタントの三大教派で大きな影響力を持っている。また，ともに中国大陸で設立され台湾で成長したものの，歴史的背景の違いから異なった展開を見せた。いずれも台湾のキリスト教を考察する上での好例であろう。

また，本稿で扱う長老教会，聖教会，真耶蘇教会，召会はいずれもプロテスタント教会であるが，台湾ではキリスト教を中国語で基督教（プロテスタント）と天主教（カトリック）という分類しており，それぞれ別個に扱われることが多い。現地の分類を無視して，研究者の側から「キリスト教」という枠組みを押し付けては本稿の目的に合わないし，無理にカトリックを扱っても議論が散漫になってしまう。そこで本稿ではプロテスタント教会に焦点を当てることとした。また，台湾にキリスト教が伝えられたのは明末の大航海時代であるが，鄭成功の台湾占領から清朝期までは宣教師が引き上げ，事実上現在の状況とは断絶しているために，対象の時代としてアヘン戦争後の近代化以降を取り扱うこととする。

(4) 台湾における言語

台湾社会を理解するうえで言語の状況を理解しておく必要がある。台湾の漢人地区での主要な言語は国語と呼ばれている北京語，台語と呼ばれている閩南語，客家語である[1]。台湾の大多数の本省人にとって母語は，福建南部からの台湾への移民たちが伝えた台湾語と呼ばれる閩南語である。

現在の中国大陸の閩南語と意思疎通は可能であるが，100年以上別々に暮らしてきたために表現法が違う部分がある。また，台湾語は日本語の影響を受けた表現が多い。ただし，台湾語とは台湾に暮らす人々の言葉という意味では閩南語以外にも客家語，原住民語など多様な言語があり，不適切な表現ではある。

一方，台湾の公用語は国語と呼ばれる北京語で，戦後国民党と共に台湾に渡った外省人が台湾に広め，中華民国の「国語」として強制力を伴ったものであった。1956年から1987年まで学校や公共の場所での国語の使用を義務づけ，1976年にはメディアでも国語の使用が義務づけられた。この時代には戦前から台湾に暮らしていた本省人にとっての母語が規制され，それまで外国語であった国語を強要された時代であった。国民党政府によるこのような言語政策は「省籍矛盾（本省人と外省人の対立）」を強める結果となった。その反動で現在の民進党政権下では台湾語を中心に客家語や原住民語などの母語の利用が進められている。このように政治的，歴史的に複雑な台湾の言語状況下では，いつどこでどの言語を使うかということそのものがアイデンティティ形成や政治的立場の表明ともなりうる[高橋1997，原1998]。当然キリスト教という宗教の場においてもこのことは例外ではない。台湾の言語状況は以下の議論において重要な要素となる。

(5) 台湾における宗教内のキリスト教の位置づけ

本論に入る前に台湾の宗教の概略を述べておく，まず，表1をご覧いただきたい。台湾政府によれば2005年現在台湾のプロテスタント信者（605,000名）は道教（7,600,000名），仏教（5,486,000名），一貫道（791,000名）に続く勢力で，カトリック（298,451名）とあわせるとキリスト教徒全体では903,451名である［The Government Information Office (ROC) 2005］。人口は2007年現在2,290万人であるので[2]プロテ

表1.　台湾の宗教別，寺廟教会数・信者数
（【The Government Information Office (ROC) 2005】をもとに作成）

	寺廟教会数	信者数
道教	18274	7600000
仏教	4038	5486000
一貫道	3218	791000
プロテスタント	3609	605000
カトリック	1139	298451
天帝教	50	279232
天徳教	14	200000
理教	138	182000
軒轅教	22	152500
弥勒大道	2150	110000
イスラム教	6	58000
天理教	150	30000
バハーイー教	13	16000
サイエントロジー	7	16000
中国儒教会	136	13000
先天救教	7	5000
中華聖教	7	3200
宇宙弥勒皇教	7	3000
亥子道	30	2300
真光	9	1000
太易教	1	1000
黄中	1	850

表 2.　台湾のプロテスタント（台灣基督教會教勢報告をもとに作成）

年	主日礼拝出席者数	信者数	教会数
1989	200470	426775	2666
1990	201543	422357	2785
1991	213583	443750	2927
1992	222519	472894	3056
1993	235651	501662	3099
1994	225595	477438	3317
1995	232725	493577	3361
1996	237051	499387	3411
1997	248122	537774	3519
1998	257976	556445	3589
1999	265555	570027	3609
2000	283645	590222	3658
2001	302291	610444	3710
2003	335863	701761	3679
2005	291205	569169	3056

スタントの占める割合は 2.6%，カトリックと合わせると 3.9%ほどとなる。

次に台湾のプロテスタントの概要であるが（表 2）[3]，1989 年から 2005 年にかけては教会数，信者数，礼拝参加者数ともに増加傾向にある。主な教派は表 3 のとおりで，信者が 1 万人以上の教派は長老教会（222,381 名），召会（99,374 名），真耶穌教会（70,618 名），靈糧堂（33,132 名），浸信会（バプテスト 26,205 名），信義会（ルーテル 13,732 名），聖教会（ホーリネス 11,582 名）である。大多数の教派が 1950 年代に台湾での宣教を始めているが，戦後信教の自由が認められ多くの教派が台湾宣教を始めたことと，国共内戦のため中国大陸から国民党とともに移住してきた教

表3.　台湾のプロテスタント教会教派別一覧（台灣基督教會教勢報告，【董 1994b】，各教派のウェブサイトをもとに作成）

教　　派　　名	信者数	主日礼拝出席者数	教会數	台湾宣教開始時期
台灣基督長老教會　THE PRESBYTERIAN CHURCH IN TAIWAN	222381	101245	1193	1865
真耶穌教会　TRUE JESUS CHURCH	70618	—	277	1926
台灣聖教會　TAIWAN HOLINESS CHURCH	11582	5791	85	1926
中國神召會　CHINA ASSEMBLIES OF GOD	2568	1555	20	1948
中華基督教浸信會聯會　CHINESE BAPTIST CONVENTION	26205	17687	204	1948
召會　LITTLE FLOCK	99374	39940	189	1948
中華基督教長老教會信友堂　HSIN-YIFRIEDSHIP PRESBYERIAN CHURCH	★3598	1799	5	1950
中華基督教信義會　CHINESE LUTHERAN BRETHREN CHURCH	1992	1504	15	1950
基督教宣道會台灣省聯會　CHRISTIAN & MISSIONARY ALLIANCE CHURCH	1706	1200	27	1951
基督教協同會聯合會　THE EVANGELICAL ALLIANCE MISSION	1825	1436	32	1951
中華福音道路德教會 LEGAL CORPORATION OF CHINA EVANGELICAL LUTHERAN CHURCH	1136	568	23	1952
基督教中華循理會　CHINA FREE METHODIST CHURCH	6865	5001	62	1952
基督喜信會　GLAD TIDINGS MISSIONARY SOCIETY	810	472	10	1952
基督教台灣貴格會　TAIWAN FRIENDS CHURCH	6025	4438	49	1952
中華基督教浸信宣道會聯會　CONSERVATIVE BAPTIST ASSOCIATION OF CHINA	4210	2869	34	1952
台灣聖公會　TAIWAN EPISCOPAL CHURCH	1022	659	15	1952
台灣基督教浸禮聖經會　TAIWAN BAPTIST BIBLE FELLOWSHIP (TABERNACLE)	1550	1096	24	1952
中國基督教長老會　CHINA PRESBYTERIAN CHURCH	200	138	4	1952
基督教中華聖潔會　CHINESE HOLINESS CHURCH	946	650	18	1953
中華基督教行道會聯會　CHINESE EVANGELICAL COVENANT CHURCH	7589	6423	35	1953
中國基督教信義會　THE LUTHERAN CHURCH R.O.C.	★1130	565	10	1953
中華基督教衛理公會　THE METHODIST CHURCH IN R.O.C.	4866	2779	31	1953
基隆教會　THE CHURCH OF KEELUNG	★698	349	7	1953
基督教台灣神召會　TAIWAN ASSEMBLES OF GOD	★1506	753	26	1953
中華基督教福音信義會　EVANGELICAL LUTHERAN FREE CHURCH OF TAIWAN	267	173	6	1954
基督教門諾會台灣教會聯會　THE FELLOWSHIP OF MENNONITE CHURCHES IN TAIWAN	1866	1324	20	1954
台灣信義會　TAIWAN LUTHERAN CHURCH	★13732	6866	54	1954
基督教錫安堂　ZION CHRISTIAN CHURCH	★3912	1956	23	1954
基督教福音浸信會　BAPTIST MISSIONARY ASSOCIATION	329	230	6	1955
台灣基督教道生長老會　TAIWAN TAO-SENG PRESBYTERIAN CHURCH	425	325	7	1955
台北新生教團　NEW LIFE CHRISTIAN CHURCH MISSION	823	753	12	1956

表 3. つづき

教　派　名	信者数	主日礼拝出席者数	教会數	台湾宣教開始時期
基督教會拿撒勒人教會　CHURCH OF THE NAZARENE	2035	1821	32	1956
基督教會台灣宣道長老會 THE GENERAL ASSEMBLY THE EVANGEL PRESBYTERIAN CHURCH	326	160	3	1956
台北靈糧堂　BREAD OF LIFE CHRISTIAN CHURCH IN TAIPEI	★33132	16566	60	1957
中華基督教便以利教會　CHINA PENIEL CHURCH	592	358	3	1958
基督徒恩惠福音會　GRACE & GLORY CHRISTIAN ASSEMBLY	1640	895	8	1958
基督改革宗長老會　CHRISTIAN REFORMED PRESBYERIAN CHURCH	1503	1235	26	1963
基督之家　THE HOME OF CHRIST	1439	1144	5	1969
基督教台北真道教會　TAIPEI TRUTH CHURCH (TRUE WORD)	2076	1618	3	1972
台北佳音教會　GOOD NEWS CHURCH	★1770	885	12	1980
台灣基督四方教會　THE FOURSQUARE GOSPEL CHURCH OF TAIWAN	★774	387	6	1989
旌旗教會　BANNER CHURCH	★1662	831	6	1994
台福基督教會　EFC OF CHRIST	★1730	865	16	1996
基督教救世軍　THE SALVATION ARMY	420	210	5	—
台灣神的教會　CHURCH OF GOD IN TAIWAN	332	140	4	—
基督教路德福音會　CHRISTIAN LUTHERAN EVANGELICAL CHURCH	198	121	4	—
中華民國台灣基督教信義會　THE LUTHERAN CHURCH OF TAIWAN R.O.C.	1806	924	21	—
崇真堂　COUNCIL OF TSUNG TSEN CHURCHES IN TAIWAN	719	497	11	—
基督教中國佈道會　EVANGELIZE CHINA FELLOWSHIP INC.	★4258	2129	17	—
台北地方教會　THE LOCAL CHURCH OF TAIPEI	★9870	4935	22	—
伊甸基督教會　EDEN CHRISTIAN CHURCH	★500	250	1	—
獨立教會　LOCAL INDEPEND ENT CHURCHES	70246	44072	536	—
中華神的教會　CHINA CHURCH OF GOD	152	88	1	—
榮美基督教會　RONG-MEI CHRISTIAN CHURCH	488	300	4	—
基督教中華協力會　CHINESE CHRISTIAN ALLIANCE CORPORATION	409	230	4	—
合計	131401	291205	3333	

★平均出席率から推測した

派が多かったことが主な理由である。

2. 台湾基督長老教会(THE PRESBYTERIAN CHURCH IN TAIWAN)

台湾基督長老教会（以下長老教会）は1865年にイギリス長老教会が南部で，1871年カナダ長老教会が北部で宣教を始めた。2005年現在，信者数222,381名，教会数1,193カ所で台湾最大のプロテスタント教会である（表4,5)。本教派は他の東アジア地域と同じく宣教師による宣教と最新技術の導入という台湾の近代化と切っても切り離せない。

まずは台湾宣教が始まる以前の宣教師の活動であるが，後に日本に渡り，近代化への貢献が大きかったヘボン（J. C. Hepburn 哈伯 1815–1911）は台湾伝道を志していた。1846年彼は家族らをつれて実際に台湾に渡ったが，同行した6家族中4名が天災で亡くなるなどして，断念し，日本伝道に転向した［伊能 1928: 134，李 2001: 52]。1860年にはダグラスとマッキンゼーが短期間ながら台湾に滞在し，アモイ語が通じることに感激し台湾宣教の必要性を強く感じた［李 2001: 52–53]。

次に実際に宣教を行った宣教師の活動を順に見ていくことにするが，南北の長老教会は当初派遣元の違いによって境界線を大甲渓[4]とし個別に活

表4. 台湾基督長老教会1914–1964年『台湾基督長老教会百年史』［台湾基督長老教会歴史委員会 1965490-494］をもとに作成

年	礼拝参加者数	信者数	教会数
1914	12137	25791	
1934		43858	
1957	66091	94960	325
1964	62343	179916	856

表 5. 台湾基督長老教会 1985 年以降（台灣基督教會教勢報告をもとに作成）

年	主日礼拝出席者数	信者数	教会数
1985	89561	200591	1043
1986	93510	205352	1058
1987	95125	208211	1070
1988	94044	211531	1094
1989	94323	209227	1104
1990	93757	206922	1119
1991	94352	208249	1126
1992	93766	215613	1147
1993	99844	229588	1160
1994	95835	217218	1171
1995	96869	221374	1172
1996	97905	224635	1183
1997	98953	227032	1191
1998	98953	224817	1202
1999	98953	224817	1208
2000	102337	224679	1203
2001	112114	227939	1203
2003	102990	217280	1218
2005	101245	222381	1193

動していた[5]。まずは南部イギリス長老教会から見ることとする。

(1) 南部長老教会

最初に台湾宣教を行ったのはマックスウェル（Maxwell, James 馬雅各 1836–1921）である。先に台湾視察を行ったダグラスらは台湾宣教には教育・医療が必要であると感じ，1865 年に医者でもあるマックスウェル

を派遣することにした。台南で宣教を始めるのだが「心を取り，目を抉り，人肉を干している」という噂を立てられる等，現地の反発にあい，台南を去り，鳳山県旗後街に三間の家を借りて，教会と診療所として活動を行っていた。しかし，1968年4月彼の家から骨が見つかったことで，現地人の怒りを買い，襲撃される。この骨は実験用の動物の骨であったのだが，人骨と誤解された。結局イギリス軍が1868年11月12日安平の砲台を占領，清朝と話し合い，賠償金1,167元で和解し[6]，マックスウェルは12月に台南府二老口街に戻った。1881年には休暇を終えてイギリスから戻った際に当時台湾にはなかった活版印刷機を持ち帰る。これが1884年バークリの「新楼書房」設立につながることとなった。また，息子のマックスウェル2世（Maxwell, James Jr. 馬雅各二世 1873–1951）も台湾や中国で医療宣教を行っている［李 2001: 52–59，魏 1996］。

1871年にスコットランド出身のキャンベル（Campbell, William 甘為霖 1841–1921）が来台する。彼は埔里，彰化，木柵，膨湖島で46年間の伝道に携わった。特に膨湖島での宣教は彼が初めてである。また宣教中，干治湖[7]（現在の日月潭）を「発見」した。現在の日月潭は台湾でも有数の観光地として整備が進んでいる。その他『台湾宣教的成功』『荷蘭人統治下的台湾』『台湾素描』『廈門音新字典（甘辞典）』など台湾に関する研究報告も数多く出版し，後の台湾研究の端緒を開いた。また，1891年には台南に聾唖者のために学校を設立し，点字聖書も作成している。この功績を認められ日本統治期の1915年には勲五等，瑞寶章を贈られている［李 2001: 57–60，伊能 1928: 133］。1917年に離台した。

1875年にはスコットランド出身のバークリ（Barclay, Thomas 巴克礼 1849–1935）が来台する。当初，リッチーの宣教の手伝いをしながら，マックスウェルの設立した「伝道師養成班」にかかわり，台湾人の宣教師を育成していたのだが，1876年には台南神学院を設立し，台湾で初の西洋式の教育を行った。彼のもとで240名の宣教師・牧師を輩出した。

1884年には上述のようにマックスウェルがイギリスより持ち込んだ活版印刷機を利用して新楼書房を設立し，翌1885年に現在の『教会公報』の前身である『台湾府城教会報』を発行し，これが台湾初の新聞となる。

1895年には日清戦争後台南に日本軍が入城する際，市内の有力商人らの要請を受けて，日本軍第二師団長乃木希典に陳情し，無血開城させ，そのため「旭日五等勲章」を贈られる。そのほか，それまで英語の外来語がそのまま使われることが多く，わかりにくかった聖書を改訳した（1914年新約聖書，1930年旧約聖書）。1935年急死し，以後長老教会の主導権は日本人に移っていく。彼の滞在期間は60年にも及び，初期の伝道師としては最も長い［井川1936，李2001: 60–61, 73–74，李（編）著1996: 166–167, 189］[8]。

(2) 北部長老教会

一方，北部カナダ長老教会がら派遣された，マカイ（Mackay, George Leslie 偕叡理，馬偕 1844–1901）が1872年に来台する。彼は偕医館（マカイ病院の前身[9]）を作るなどして医療伝道を行い，特に有名なのは各地で行った歯科治療で29年間の伝道中に少なくとも4万本の歯を抜いたといわれている。当時の台湾はタバコやビンロウの習慣から歯に疾患を持つものが多く，効果が大きかった。また，台湾人女性の張聡明と結婚した。彼女は五股坑の信者陳塔嫂の孫で，彼らの結婚は当時の教会中から歓迎された。1882年には淡水に牛津学堂 (Oxford College) という学校を設立する。彼の出身地であるカナダのオンタリオにあるオックスフォードの住民が多大な寄付をしたために校名を牛津学堂とし，本校が現在の台湾神学院の基礎となった。彼の宣教で北部に60件の教会と3,000人の信者を集めたという。北部の台湾人の外国人やキリスト教への理解が得られていない当時これは大きな成果であった。また，南部で数人の宣教師によって行われた医療，教育などの社会活動も北部では主に彼が中心になって行っ

たということになる。1901年台湾で没する［台湾基督長老教会総会歴史委員会 1965: 50–60，中華民国内政部編印 1991: 70］。

北部長老教会は南部に比べて宣教師が少なかった。そこで活躍したのが台湾人の厳清華 (Giam Chheng-hoa 1852–1909) である。彼は淡水生まれで，一時天津や北京に滞在していたので，中国語を話すことができた。1873年に受洗し，北部初の台湾人信者で，五股坑教会の駐任伝道師となり，1882年の牛津学堂開校時に教員として勤め，1885年には初の台湾人牧師となった［台湾基督長老教会総会歴史委員会 1965: 50–60］。

(3) その後の長老教会の歴史と政治的スタンス

初期の長老教会は外国人宣教師の指導による医療，文化社会活動によってリードされていた。現在でも宣教以外の社会活動という傾向は発展的に引き継がれマカイ紀念病院，新楼基督教医院，彰化基督教医院等の病院が地域の大病院として利用され，長栄中学，長栄女中，長栄高校，淡江高校，淡江大学，台南神学院，台湾神学院，玉山神学院，長栄大学等の教育機関でキリスト教神学以外であっても教育されている［林主編 1996］。

そして何より台湾の長老教会の特徴はその独立派的政治立場であろう。再三述べられているように戦後の台湾人は祖国中華民国への光復を喜び，期待していたのだが，実際の国民党政府は腐敗しており，「犬が去ったら，豚が来た」といわれる状況になる。急激なインフレや失業率の悪化，国民党による日本企業の接収，役人・警官・軍人の不法行為等，台湾人の期待は失望に変わる。このような状況下，1947年，二二八事件が勃発する。台湾全島を巻き込んだ台湾人の蜂起は大陸からの増援部隊の武力の前に1週間ほどで鎮圧され，殺害された台湾人は2万8千人にのぼるといわれている。その後は1987年までという世界史上例を見ない長期の戒厳令下に置かれることとなった［高橋 1997］。この事件の被害者の中には岡山教会伝道師蕭朝金，淡水中学校長陳能通，台湾大学の林茂生，花蓮の医師

写真 1.　台湾独立を求めるデモに参加する長老教会のメンバー

張七郎など多くの長老教会関係者が含まれていた。

長老教会は 1971 年台湾の将来は台湾のすべての住民によって決定され，台湾で総選挙が行われねばならないという趣旨の「国是声明」（我々の国家の運命についての声明）を出し[10]，1975 年には台湾語聖書の没収に抗議し，「富の不平等分配」に関してしいたげられた大衆のために発言して，国民党政府に台湾のあるべき未来像を明らかにするよう求める「我們的呼籲」（我々の呼びかけ）という声明を出した。1977 年には台湾の将来はその土地の 1,700 万の人々によって決定されなければならないという「人権宣言」[11] を発表した［鄭 1981: 106–110］。同 1977 年の桃園県長選挙での不正に関して発生した中壢事件では長老教会信者の邱奕彬が逮捕され，1980 年には前年の美麗島事件（別名高雄事件）[12] で「犯人逃走幇助と隠匿」の容疑で高俊明牧師ら長老教会関係者が逮捕され[13]，同 1980 年美麗島事件で逮捕された林義雄の自宅で母親と双子の娘が何者かによって殺される林義雄家族虐殺事件が起きる［戴 1988: 180–181，伊藤 1993: 185，高俊明ほか 1982: 181–192 等］。

この後も長老教会は多くの声明を出し，また台湾の独立を求める政治的な活動を行っている（写真1)。これは政治に翻弄され続けた本省人を主な宣教対象とし，台湾語を用いて宣教し続けてきた長老教会にとって戦後の国民党による白色テロや外省人ともに移住してきた国語教会との対立などの要因もあるであろう。台湾の長老教会を理解するには台湾の置かれている政治的な状況を理解する必要がある。

3. 台湾聖教会（荷里寧斯，ホーリネス，TAIWAN HOLINESS CHURCH）

台湾聖教会（以下，聖教会）は1926年日本のホーリネス教会から派遣された安部藤夫の設立した台北教会によって始まる。1928年には台湾人牧師高進元・王錦源らによる台湾人宣教も始められた。2005年現在の信者数は11,528名，教会数85カ所となっている（表6, 7)。本教会は戦後台湾で宣教を始めた国語教会に分類されることが多いが，戦前からの台湾

表6.　台湾聖教会 1926-1987年（【会史編輯委員会 1989】をもとに作成）

年	教会数	主日礼拝参加者数	受洗者数	累計受洗者数
1926	17	—	726	726
1944	0	—	150	150
1946	3	—	150	150
1951	11	609	112	262
1956	33	1451	179	903
1961	47	1335	217	1894
1969	58	2150	—	3087
1974	59	2444	255	4118
1979	62	2786	264	5405
1984	65	3200	274	6639
1987	72	3440	310	7668

表 7.　台湾聖教会　1985 年以降（台灣基督教會教勢報告をもとに作成）

年	主日礼拝出席者数	信者数	教会数
1985	4582	16819	70
1986	5148	18010	72
1987	5173	17678	74
1988	5113	18187	77
1989	5167	18324	79
1990	3911	18800	81
1991	3974	19400	83
1992	4273	19700	86
1993	4571	20000	89
1994	4581	20044	90
1995	4735	20718	91
1996	4572	20997	94
1997	4605	21272	93
1998	4754	21390	90
1999	4986	21687	90
2000	4970	21845	86
2001	5239	22100	87
2003	5522	11044	87
2005	5791	11582	85

人による台湾人のための宣教を行ってきたという点で他の国語教会とは異なる。本教会を取り上げることでより多声的な台湾のキリスト教のあり方を提示したい。

聖教会が台湾に成立するのは 1926 年であるが，それ以前にも公私の立場で個別に宣教が行われていた。最初に台湾にホーリネスを伝えたのは遠

藤亀蔵で1910年日本ホーリネス教会の福音使として，台湾原住民宣教を行ったが，1912年37歳で没した［会史編輯委員会1989: 48］。1911年には東京聖書学院で学んだ井上伊之助(1982-1966)が原住民への医療宣教を行うために台湾に渡った。彼は父親を原住民に殺害されているのだが，キリスト教徒として原住民をキリスト教化するという方法で「父の仇を取ろう」と台湾に渡る。彼の台湾での生活は『台湾山地伝道記』［井上1960］としてまとめられている[14]。戦後の1947年に帰国した［会史編輯委員会1989: 48］。1919年後に真耶蘇教会に入信し長老となる須田清基も当初はホーリネスの福音使として台湾入りする。彼に関しては真耶蘇教会の項で詳述することとする。

上記の個人による宣教のほか帳幕伝道隊という宣教団が1921年，1923年，1925年の3回日本から派遣されている。特に25年には当時の指導者の一人車田秋次が参加し，翌年の台湾宣教の基礎となった［会史編輯委員会1989: 49］。

そして，1926年安部藤夫(1887-1976)が台北に派遣され台湾最初の聖潔教会が設立する。安部は救世軍出身で，東京聖書学院で学んだ。1931年離台した［会史編輯委員会1989: 59-60］。

安部とともに台湾に渡った日本人に大井芳枝(1892-1973)がいる。彼女も1926年に東京聖書学院を卒業し，台湾聖潔教会の設立に関わった。現地の人間と結婚すべきであるという中田重治の指導で7月アミ族頭目の子，周峯永と結婚する。日本人の女性が台湾の原住民男性と結婚することは当時としては異例のことで，原住民の生活に根ざした宣教から多くの成果をあげた。また，多くの日本人は戦後引き上げたが，彼女は1973年の夫の死まで台湾にとどまり，宣教を続けた［会史編輯委員会1989: 60-64］。

この時点までは日本人による在台日本人のための宣教が中心で当時の他の教派と大差はない。しかし，1928年より台湾人の高進元(1900-1963)

らが台湾人を対象とした宣教を開始する。彼は苗栗県苑裡鎮出身で，1910年新竹で求学中同級生と教会に行ったところ「宇宙主宰」の文字を見たのをきっかけに入信した。仕事で日本を訪れた際に中田に出会い，後に東京聖書学院に留学する。1928年台湾に戻り，台南教会を設立する。協力者のいない開拓伝道に当初苦しんだが，1936年には信者も増えて現在の台南市公園路に移転する。1952年過労で倒れ，1963年没した［会史編輯委員会 1989: 119-122］。

もう一人の台湾人指導者に王錦源(1909-1982)がいる。彼は台南県西港郷出身で，幼いころ一家に災難があり，1910年佳里長老教会に一家で入信する。小学5年次に飛び級で長栄中学に進学するほど秀才であった。東京聖書学院に学び，1928年西港教会を設立した。1946年新竹教会へ移動，1948年台湾聖経学院委員長，51年には遠東宣教会と協力して中台聖経学院を設立，副院長，1951年台湾聖教会発起人会議にて主任委員，同年5月には理事制に移行し常務理事となった。1952年高進元が病気のため，理事長，1954年理事制から委員制になり，委員長となる。1956年には財団法人となり，董事長に。1957年委員制が会督制になり，会督になり，1960年執行委員制になり，主任委員となる。1961年には聖教会を離れ，超教派運動を行い，「福音基督教会」，「台湾基督教福音連盟」を設立した。1979年退職後ロサンゼルスに移住し，台語福音教会で教会学校の成人科を担当し，1982年ロサンゼルスで没した［会史編輯委員会 1989: 122-124］。

本教派の特徴はミッション系国語教会でありながらも台湾人によって台湾人へ宣教をしたという点であろう。国語教会と呼ばれている教派は戦後国共内戦の激化から大陸での宣教をあきらめて台湾に移住した教会を中心としている。日本統治期に日本から伝えられた教派には聖教会のほか，日本聖公会，日本組合教会，日本救世軍，日本メソジスト教会等があるが，聖教会以外は在台湾の日本人を宣教の対象とし，台湾人を積極的に対象と

はしなかった［戒能 1984］。そしてこれらの教派は戦後，日本に引き上げたので，戦後の教会との連続性は少ない。

こうした状況の中，台湾人を対象とした国語教会という本教派の立場は独特である。筆者が2005年から2007年にかけて参与観察やインタビューによって調査を行った台南市内の開山聖教会では日曜日の午前8時30分から中国語礼拝，午前10時から台湾語による礼拝が行われている。当教会内での雰囲気としては中国語と台湾語の礼拝参加者の違いは外省人と本省人という分類よりも，若者は中国語，ある一定以上の年齢になると台湾語の礼拝に参加していた。また，国語教会であるものの長老教会と協力関係にあり，イベントの際など互いに参加しあっている。この背景には国語教会でありながらも日本統治期から台湾人を対象とし続けてきた本教派の立場が現れているものと思われる。

そして，国語教会の中でもこのように台湾人に密着する形で宣教を行ったのが聖教会であったということが興味深い。池上がいうように日本におけるキリスト教の多くは中産階級や知識人階級を中心に信者を獲得していった中で，ホーリネス派は一般の民衆を主な対象として成功した。ここで言われている民衆とは都市の中下層の商工業者や奉公人，地方の鉱山労働者等である［池上 2006: 8］。そのホーリネスを母体とする聖教会が台湾では日本人だけではなく台湾人をも対象とした背景は池上が「民衆キリスト教」と位置づけた日本のホーリネスと共通のものであろう。台湾で聖教会に先行して宣教していた長老教会は教育・出版などで大きな業績があったが，やはりこういった事業は「読書人」と呼ばれる当時の知識人階級を中心的な対象とせざるをえなかった。一方，聖教会は1910年の遠藤亀蔵の原住民宣教，1911年の井上伊之助の原住民医療宣教，1926年の大井芳江の原住民との結婚のように当初から積極的に原住民宣教を行った。そして，大井の結婚には中田重治の指導があったというから，当初から意図的に原住民宣教が行われていたと言っていいだろう。一方，長老教

会は1924年になって最初の原住民の信者[15]を獲得している［加藤1984］。1865年に宣教を始めてから60年近くたってからである。長老教会が台湾宣教を始めたころには原住民地区での宣教は事実上不可能であったので，長老教会には原住民への宣教の意図が薄かったと結論づけるわけにはいかないが，聖教会が宣教を開始した時期も総督府によって原住民地区での宣教は禁止されていて，困難な状況であった状況は同じである。いずれにせよ，聖教会とそれ以外の教会の間には宣教対象にずれがあったといっていいであろう。日本では民衆を対象とした聖教会が台湾では在台日本人以外にも原住民や台湾人を積極的に対象として布教していたことは東アジアの同時代のキリスト教研究に対しても重要な意義を持つものであろう。

表8. 真耶穌教会　1945-1995年（［真耶穌教会台湾総会1996］をもとに作成）

年	信者数	受洗者数	教会数	伝道者数	聖職人員数
1945	5057	—	36	—	—
1950	8475	1588	49	—	—
1955	15068	1431	89	—	—
1960	19657	1367	110	47	84
1965	25174	1315	135	51	87
1970	29387	1155	156	79	116
1975	33491	1297	174	78	186
1980	36622	1239	191	97	179
1985	39441	1034	211	85	239
1990	42513	1200	215	100	311
1995	46384	1299	224	108	362

※聖職人員とは長老，執事を指す。

表 9.　真耶穌教会 1989–2005 年（台灣基督教會教勢報告をもとに作成）

年	教会数	信者数
1989	208	40939
1991	256	42513
1993	259	44569
1995	259	44569
1997	260	47327
1999	262	71327
2001	290	70359
2003	290	70359
2005	277	70618

4.　真耶穌教会（真イエス教会，True Jesus Church）

真耶穌教会は 1917 年北京でペンテコステ運動の影響で設立された。聖書主義に基づき洗礼，洗足，聖餐，安息日，聖霊の五大教義を持ち，神は父・子・聖霊の三位ではなく，ともにイエスが姿を変えて現れたというワンネス系の神観を持っている。台湾には 1926 年に伝わり，戦中期に一時停滞するも，戦後は台湾に本部を移し，順調に成長した。2005 年時点で信者数 70,618 名，教会数 277 カ所（表 8, 9)。本教派の内容は日本で知られていないが，歴史や教義に関しては［藤野 2005a］を参照されたい。

まず，創設者の張霊生であるが，彼は 37 歳で長老教会に入信し執事も勤めた。1909 年，長男が上海信心会で聖霊の教義を耳にし，その年の旧暦の 12 月 21 日に聖霊を受けた。翌年セブンス・デー・アドベンチストの影響で安息日を土曜日とする。1913 年には自宅で「耶穌真教会」を開く。1917 年，「神教会」の影響で按手を受け長老となる。1918 年，魏パウロと協力して万国更正教真耶穌教会を設立した［中華民国内政部編印

1991: 134]。

張霊生と協力し，真耶蘇教会の教義に影響が大きかったのが魏パウロ（魏保羅）である。彼はセブンスデー・アドベンチストの教義を研究し，安息日を土曜日とする教義を採用し，信心会の長老の按手によって病が癒され，入信する。1917年，「顔を下にして洗礼をせよ」という声が聞こえ，洗礼の方法の教義が示される。「真耶蘇教会」の名前を確定したのも彼である［中華民国内政部編印 1991: 135］。

南部伝道で大きな功績があったのが張バルナバ（張巴拿巴）である。彼は1909年張霊生の影響でキリスト教徒なった［中華民国内政部編印 1991: 134-135］。しかし，指導者としての地位を巡って対立し，1930年に除名された。

日本人の伝道者として須田清基(1888-1981)がいる。彼は群馬県安中市に生まれ，救世軍士官学校，東京聖書学院，台北神学校等に学び，ホーリネスの福音使として宣教中に真耶蘇教会に接触し1927年受洗。日本人唯一の伝道者となる。1923年には軍籍を離脱し，戦後は帰国し日本にて宣教，社会活動を行う。内村鑑三，中田重治らの影響を受けている[16]。

本教派は台湾で独立教会と分類されることが多い。しかし，当教派は戦前から台湾人を対象に宣教してきた教会であり，主に外省人を対象とする他の国語系独立教会とは状況が異なる。当教派の礼拝で利用される言語は主に台湾語で（その地域の住民が主に使う言語なので，例えば原住民地域では原住民語），中国語に翻訳される。讃美歌は中国語のものが利用されているが，他の言語にも翻訳されており，個々人にとって都合の良い言語で歌うことができるようになっている[17]。政治的な立場は中立で，教会内には様々な立場の人間がいる。これは台湾人を対象としながらも教派自体が中国由来であることに関係しているのかもしれない。当教派の教義にはイザヤ書41章2節[18]などを根拠に，社会に媚びることで聖書から離れてしまった現代教会に対して真の教会が東方（つまり，中国と解釈される）

から起こるというものがある［日本真耶蘇教会本部編 1943: 30–33］。政治的には難しい中国と台湾の関係あるが当教会ではそこに立ち入らないことで解消しているようである。

5. 召会（教会集会所，小群，LITTLE FLOCK，地元にあって合一である立場に立つ教会）

召会（教会集会所・小群）は1926年中国大陸で成立，1948年に台湾宣教を開始した。台湾では外省人を中心に急速に信者を増やし，現在プロテスタントの三大教派の一つとなっている。2005年時点での信者数99,374名，教会数189カ所である（表10）。本教派の教義に関して管見では日本語で読めるものは非常に少ない[19]ので，簡単に報告する。

この教派の最大の特徴は団体の名称がないということであろう。教会は唯一であるべきで名称は必要なく，「某地方の教会」とすればよく，召会や教会集会所とは登記時の便宜上の名前であって，本来の名前ではないという。各地方教会は独立しており，区会，総会などは設けていない［中華民国内政部編印 1989: 240–241, 246］。その他，洗礼の方法について創設者のウォッチマン・ニー（Watchman Nee 倪析声 1903–1972）が以前に所属していたメソジスト教会が行っている頭だけ水につける滴礼は聖書的ではないと批判し，全身を水に浸す浸礼を採用している。聖餐に関してもパンを誰が割くのは牧師である必要はないとし，さらに信徒全員が祭司であるべきで，特別に牧師等の役職を設置しないとしている[20]。

召会の創設者ウォッチマン・ニーは3代目のクリスチャンで，祖父倪玉成は福州北部会衆派の中国人初代牧師である。彼は聖公会三一学院で学んだが，神学校などには通わず主に独学で聖書を学ぶ。ウォッチマンは「見張り人が夜回りして時を知らせる音」の意であるという。1922年より独自の方法での宣教を開始，1925年福音書房を設立し[21]，1927年「上海にある教会」を設立，1948年中国大陸で宣教を続けるには危険が伴う

表 10.　召会（台灣基督教會教勢報告をもとに作成）

年	主日礼拝出席者数	信者数	教会数
1988	10000	20000	119
1989	13000	26000	167
1990	15600	31200	200
1991	18720	37440	228
1992	19132	38264	228
1993	20192	40384	229
1994	21101	42202	439
1995	22241	44482	439
1996	23575	47150	471
1997	26042	65106	503
1998	29298	73245	588
1999	32554	81383	626
2000	34670	86266	645
2001	36750	91442	669
2003	38,373	98,108	702
2005	39,940	99,374	189

が上海にとどまる決意をする。1952 年逮捕・入獄，15 年の刑が言い渡されていたが釈放されることなく，1972 年獄中で死亡した。

中国大陸で逮捕されたウォッチマン・ニーの後継者がウィットネス・リー（Witness Lee 李常受 1905–1997）であり，台湾宣教を始めたのも彼で，山東省生まれで，1925 年よりウォッチマン・ニーの著作から影響を受ける。1932 年より直接指導を受ける。1933 年に専任の全時間という役職について働き始める。1949 年 5 月ウォッチマン・ニーが上海にとどまるので，彼は中国を脱出しウォッチマン・ニーの継承者として宣教を

続け，台湾伝道をはじめ，同年中に505人に洗礼する。1962年アメリカ伝道開始，1974年にはアメリカ合衆国カリフォルニア州のアナハイムに本部を移動する。1997年没した。

本教派は中国大陸で成立し，戦後台湾に伝わり，外省人を中心に中国語で宣教して成功した典型的な国語系独立教会であるといえよう。上述の真耶穌教会やそれ以外の独立教会も福音派的な傾向が強い[22]。これまで繰り返し述べられてきたように台湾の宗教は神秘体験や霊的なものへの志向性が強い[23]。そういった地域で展開したキリスト教だから福音派的要素が強いのか，それとも現代的なキリスト教であるからなのだろうか。答えは簡単には出ないだろうし，意見は分かれるが，おそらく両方の要素があるのであろう。ローカルであり，かつグローバルな動きとしておきたい。

また，以前は国民党や外省人が反共の姿勢を打ち出していたが，独立派の勢力が拡大するにしたがって，国民党は中国共産党への態度を軟化させ，台湾の国民党も台湾独立を阻止するために両党の距離感は縮まってきている。むしろ最近では独立派のほうが反共の姿勢を強めており，国語教会全体がこういった社会変動に対してどのような対応をとるのかも見守りたい。

当教派はカリスマ性の強い2人の指導者の影響力が大きいが，カリスマ性をもった指導者によって作られた宗教教団の多くに見られたように分裂が起きている。まず，ウィットネス・リーがアメリカ移住した際にウォッチマン・ニー派とウィットネス・リー派に分裂しウォッチマン・ニー派が弱くなって「基督徒集会」となり，ウィットネス・リー派が「集会所」の名称を維持したようである［董1994a: 168］。現在ではウィットネス・リーの死後10年たっている。カリスマティックな指導者によって成長し，歴史も浅い本教派にとって体制をどう維持するのかは大きな課題であろう。

本教派には上記の2名の強いカリスマ性を持った指導者がいたために

必然的に政治的な立場が決まってしまう。つまり，国語独立系教派の指導者は外省人であり，集まる信者も外省人や中国語を話し，統一派的な政治的な立場をとる人が多くなるであろう。また，独立派的な立場の者がいても外省人への批判は，教団内で「今の時代における神聖な啓示の先見者」とされているカリスマ的な指導者の批判にもなってしまう。中国由来の宗教が台湾で活動する場合に同様の問題が常に付きまとう。台湾最大の仏教教団の仏光山も戦後台湾に渡ってきたために教団自体の思惑があろうとなかろうと国民党寄りというイメージを持たれやすい［五十嵐 2006: 201–203］。台湾でも広く活動している法輪功は反共の姿勢を強く打ち出しているが，中国自体を否定してしまうと自らのアイデンティティクライシスに陥る。そこで，「中華文明」はよいものであるのだが，共産主義という悪に侵されているので，共産主義を駆逐し，正統な中華文明を復活させようとするというスタンスで一貫性を保っている。アイデンティティや民族意識がゆれている現代の台湾社会において「中国」や「台湾」という概念の持つ政治性が生活のあらゆる場面に影響しているが，宗教に関する局面も例外ではない。むしろ，アイデンティティやエスニシティ等と結びつくために宗教と政治の問題は台湾社会において重要性を増している。

6. 分析

以上台湾のプロテスタント教会4教派を紹介してきた。簡単に整理しておきたい（図1）。第一に長老教会は清末から台湾での宣教を開始し，日本統治期になり日本からのミッションは在台日本人に宣教していても，戦後国語教会が外省人を中心に宣教しても，現在本省人と呼ばれている明末清初ごろ台湾に渡ってきた移民である漢人の子孫達や原住民を中心に宣教を続けた。彼らの母語として使われることの多い台湾語を積極的に利用し，日本統治期や国民党政権の下では好ましからざる教会であった。一方民進党政権下となった現在では独立派の勢力拡大から政府与党との結びつ

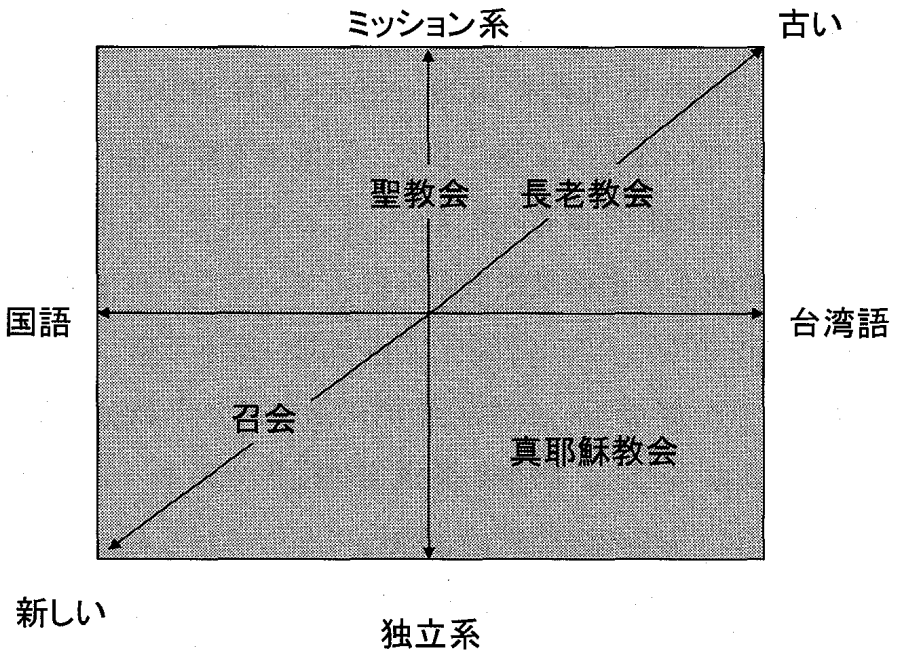

図1.

きは強い。このように長老教会は本省人との距離が近いために常に政治のあり方に影響されてきた。第二に聖教会は一般的に国語教会と呼ばれる国共内戦の激化から台湾に渡ってきた教派の一派として扱われるが，海外のミッションとの関係を維持しながらも日本統治期から台湾人への宣教を続けてきた。教派の類型を実体化するつもりはないが，この教派は国語教会と台湾語教会という区分の境界線上にあるといえよう。第三に真耶穌教会は，独立教会ではあるが，戦前から活動しているので台湾語を重視する。しかし，長老教会のように反中国という立場はとらず彼らの教派が中国由来であることから政治的には中立を取らざるをえない。しかし，かえってそのことで本省人にも外省人にも宣教をすることが可能で，非常に有利な状況となっている。第四に召会は中国で成立し，戦後台湾に渡ってきた国語教会という独立教会の最も良い事例で，聖書無謬説をとり，カリスマティックな指導者を中心に発展するなど福音派的傾向が強い。真耶穌教会と召会は独立教会であるが，文化人類学で展開している「独立教会」の研究を参照すると「欧米のミッションの影響で設立」したが，その後「地域

の文脈で教義を読み替える」，最終的に「ミッションとの関係を切る」等多くの共通点が見出せる［中林 1979, 1994，石井 2007］。しかし，一見同様な展開を見せているように見えるが，現地の文脈で読み替えている以上，各地での展開が同じとは考えにくい。たとえばアフリカでは西洋経由のキリスト教の教義を現地の文脈で読み替えていくことは宗主国への抵抗となりうる［石井 2007］が，台湾では宗主国が日本であったためにキリスト教の位置づけが異なる。日本統治期にはキリスト教会も他の宗教同様，規制の対象となったし，戦後の国民党政権下でのキリスト教は一枚岩ではなく政府に近い立場の国語教会と政府にとって好ましからざる台湾語教会に分かれていた。当然社会が異なればコンテクストも異なる。それだけではなく，同じ台湾社会内での展開を見ても，真耶蘇教会と召会でも異なった展開を見せた。地域内の研究と地域を越えた詳細な比較研究が必要となるだろう。

杉本良男らの提唱する「福音化」という概念も台湾の文脈の中で再考が必要である。杉本によれば「福音化」は文明化と表裏一体であって，その背景には植民地主義やそれらと協力関係にあった人類学そのものへの批判の可能性も含んだ議論である［杉本編 2002］。しかし，台湾の場合，植民地化はキリスト教国ではない日本によって行われた。もちろん当時の宗主国である日本の近代化には西洋の影響が強いのでキリスト教と無関係とは言い切れないし，長老教会の行った教育・医療など社会・文化事業は台湾の近代化への影響は大きい。しかし，台湾における「文明化」と関係がより強いのは「皇民化」であろう。台湾の文脈では「福音化」と「文明化」の他に「皇民化」というファクターも重要である。

また，聖教会のようにカテゴリーの境界線上に位置する教派の存在は重要である。本稿での意図は台湾のプロテスタント教会を考察する上での視座を提出することである。上記の 4 カテゴリーは関係性を重視した分類であり座標軸として利用すべきで，実体的なカテゴリーとして考えている

わけではない。当然，カテゴリーのいくつかにまたがってしまうことも，境界線上に位置するとも，カテゴリー間を移動することも考えられるだろう。これまで日本の宗教社会学では新宗教の教団類型論について多くの業績が挙げられているが，それまでのカタログ的・静態的研究に対して類型間移行の可能性を持った変容・継承論的な研究へのシフトが若手研究者から提案されている［寺田・塚田 2007］。今回提示したモデルは静態的であったが実体的に利用するのではなく，動態的で構築され続ける対象をみる視座として考えている。

最後に4教団を比較する（表11）。第一に長老教会はいうまでもなく，国語教会でも聖教会は台湾語を使うことや独立教会の中でも最も古い真耶穌教会が台湾語を利用し，独特な立場を確立してきたように，年代が古いほど台湾語を利用する傾向がある。特に日本時代に宣教していたキリスト教会が戦後の国語教会とは断絶して台湾語を重視しなくなったのに対して，聖教会の立場は重要である。聖教会も日本時代と現在の宣教が分断されていたのであればおそらく台湾語を重視することはなかったであろう。第二に召会は宣教期間も他の3教派と比べて短く，宣教対象も少数派である外省人であるにもかかわらず，これだけの信者を獲得している。上述のように国語教会が台湾に移ってきた当時，地縁・血縁を失い内戦にも敗北した外省人の宗教への需要が高かった。そのなかで彼らの理解可能な中

表11.　4教派の比較図

	台湾での宣教開始年代	信者数	教会数	言語	ミッション系か独立系	政治的立場	プロテスタントでの分類	主な宣教対象
長老教会	1865	222,381	1,193	台湾語	ミッション	独立	主流派	本省人
聖教会	1926	11,528	85	国・台併用	ミッション	中立	福音派	全般的
真耶穌教会	1926	70,618	277	台・国併用	独立	中立	聖霊派	全般的
召会	1948	99,374	189	国語	独立	統一的	福音派	外省人

国語で礼拝をし，なおかつ漢人によって再構築された国語系独立教会の需要が高かったことが窺い知れる。第三に世界的なプロテスタントの分類では聖教会と召会は同じ福音派とされるが，両教派の共通性は薄い。むしろ，本省人と近い立場を保っているために聖教会は主流派とされる長老教会と関係性が強い。このように台湾のプロテスタント教会を概観する際に世界的な分類が利用できないこともある。とはいえ，ミッション系の母教会との関係もある。長老教会は主流派キリスト教の世界機構である世界教会協議会(WCC)に参加しているし，聖教会は世界福音同盟に加盟している日本ホーリネス教団と協力関係にある。真耶穌教会はこれまで他の教派との関係はなかったが，成立に当たって影響を受けた教派の教義等を研究し始めた。このような状況から考えて，台湾のプロテスタント教会には二つの区分が存在しているといえよう。一概には言えないが，現状として概ね教義的なレベルでは世界的なプロテスタントの区分が利用されている。しかし，信者の生活実践は教義だけで生きられるものではない。かといって，生活実践と宗教信仰を分断できるというわけでもない。そこで実践のレベルでは神学と生活をすり合わせて台湾でのプロテスタントの区分が利用されるという構造が見えてきた。こういった構造は一見，政治的立場と宗教的信仰が歪んでいるように見える。しかし，政治と宗教というアイデンティティ形成に深く関わるものに矛盾を抱えながら生活しているとは考えにくい。むしろ歪んでいると見える研究者側の視線こそ歪んでいる可能性もありうる。その一見矛盾したように見える論理構造をどのように生活者らが解決しているのかを現地の文脈から明らかにしなくてはならないだろう。しかし，これは今後の課題としたい。方向性としては神学的レベル，歴史社会的文脈のレベル，信者の信仰実践のレベルがどう交差しているのかを考えていくべきであろう。

8. おわりに

台湾は民族構成，政治的状況，言語など非常に複雑な社会である。全体をまとめ上げるのは容易な作業ではない。台湾のキリスト教が置かれている状況もこういった社会の中にあるので，一定のコンテクストからではなく，様々な文脈から総合的に考察することが必要である。そうでなければ特定の立場にとって有利・不利な情報ばかり伝えることともなり，学術研究にはふさわしくないであろう。台湾の宗教研究自体も民間信仰や道教研究が多くを占めている。これらの研究の意義は大きいのだが，台湾という社会の特性を考えるならば，それ以外の宗教も含めて総合的に考察するべきである。つまり，できるだけ多くの文脈から判断すべきで，これまで取り扱われることの少なかった台湾のキリスト教研究の意義は大きいと考える。筆者はこれまで宗教の担い手側の視点に立って研究を進めてきたが，今回は教団側の視点から考察した。多くの文脈ということでは両者を取り上げて総合的に考察すべきである。そういった意味では本稿は四つの教派しか取り上げられなかったが，ほかにも特徴的な教派は多い。当然そういった教派の分析も必要であるし，キリスト教にこだわらず他の宗教も理解しなくてはいけないだろう。これらは今後の課題とさせていただきたい。

キリスト教は世界的な宣教との関わりを持つことが多い。それは欧米由来の教派だけではなく，今やアジア由来の教派も積極的に海外宣教を行っている[24]。本稿で取り上げた真耶穌教会や召会も本部をアメリカに置いて，宣教地を世界中に広げている。こういった現代的な展開ではミッション系，独立系の隔てなくグローバルな文脈の中で語られるべきであるが，同時に地域の社会的文脈を無視するわけにもいかない。世界的に主流派，福音派，聖霊派と区分されているプロテスタント教会も現地の文脈で再解釈・再統合されていく。社会的な文脈からキリスト教を再考する試みが進

められているが，グローバルな傾向と地域の文脈の両方を視野に入れた上でのキリスト教研究を進めていく必要があるであろう。

---

[1] そのほか原住民語や日本統治期から利用されている日本語，さらに外国人配偶者の利用する外国語も一部利用されており，非常に複雑な状況である。本稿では議論を明確にために漢人地区での言語に対象を絞って考察することとする。

[2] 外務省のウェブサイト (http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/taiwan/data.html) による。

[3] 本稿のデータのうち幾つかは台灣基督教會教勢報告 (http://www.ccea.org.tw/church/adlink/statics/about1.htm) を利用した。本サイトを運営する基督教資料中心は中華基督教浸宣会（バプテスト）系の団体で浸宣会を引退した朱三才牧師を中心に活動している。インターネット上の情報ではあるが，内容は出版もされ，信用に足り，また，他に同程度の水準の情報がないだけに，利用することとした。また，表1で利用した台湾政府による統計と数値の差が見られるが，両者の統計方法の違いや真耶穌教会，セブンス・デー・アドベンチスト，モルモン教等をプロテスタントと教会の一部とするか，新宗教とするかといった扱いの違いがあると思われる。

[4] 梨山国家風景区から台湾の中部，台中県を流れる。

[5] 1941年太平洋戦争発生の直前に宣教師が帰国し南北両教会は合併する［陳 1992: 83］。

[6] このイギリス軍の派遣の背景には1868年に発生した清国官僚と外国人との間の樟脳の取引をめぐって発生した「樟脳—教会事件」がある。

[7] オランダから台湾への最初の宣教師カンディディウス，ゲォルギウス（干治士 1597–1647，1627来台）に因んで命名された。

[8] バークリに関しては『バアクレイ博士の面影』［井川 1936］に詳細にまとめられている。古い資料ではあるが参照されたい。

[9] マカイ紀念病院は1912年台北市内の双連に設立される。

[10] この前後には「好ましからざる人物」として迫害され海外に移住した長老教会関係者は多かった［日本基督教団台湾関係委員会編 1984: 199］。

[11] 今年2007年は「人権宣言」より30年にあたり，高雄市内で大規模なデモが行われた（東京新聞，東京2007年8月12日等）。また，これらを含め長老教会が出した声明はインターネット上で全文を読むことができる (http://www.pct.org.tw/ab_doc.htm（2007年11月現在）。なお，これら3声明の日本語訳は［日本基督教団台湾関係委員会編 1982］に収録されている。

[12] 1979年美麗島雑誌社が設立され，このメンバーを中心に高雄で世界人権デーでの大規模なデモを企画したが，当局の取締りを受ける。このとき逮捕されたメンバーには施明徳，呂秀蓮，陳菊らがおり，陳水扁，謝長廷，蘇貞昌ら若手の弁護士が弁護にあたった。いずれも後に民進党の指導者となる。

[13] 高俊明をはじめ当時の長老教会での指導的な立場にあった牧師らの説教は日本語に訳され，まとめられている［高ほか 1982］。

[14] それ以外にも岸本羊一も井上の台湾伝道についてまとめている［岸本 1984］。
[15] チワン（芝苑）という名の花蓮の女性で，彼女は後に「山地教会の母」と呼ばれる。
[16] 須田に関しては軍籍離脱問題で取り上げられることが多い［伊谷 1967. 1971 田島 1971 萩原 2000 等］。また息子の須田献東は父清基の書いたものをまとめて自伝を自費出版している［須田 1996］。
[17] 例えば日本の真イエス教会では中国・台湾人と日本人が同時に礼拝に参加するので，中国語と日本語の賛美歌が用意されており，各自好きな言語で歌えばよい。
[18]「だれが東から人を起こしたか。彼はその行く所で勝利をもって迎えられ，もろもろの国を征服し，もろもろの王を足の下に踏みつけ，そのつるぎをもって彼らをちりのようにし，その弓をもって吹き去られる，わらのようにする。」（『聖書（口語訳）』より）
[19] 召会に関して山本澄子は簡単に紹介しているが［山本 1972: 90–96］，情報量が少なく，古いので現在の状況とは異なる部分が見受けられる。
[20] とはいえ，「全時間」という専任の役職を設け，彼らが主に礼拝を取り仕切っている。
[21] 現在ウォッチマン・ニー，ウィットネス・リーらの著作を出版，外国語に翻訳している。台湾には 1950 年台湾福音書房を設立している。
[22] 董芳苑は当教派をペンテコステ運動の一環に入れている［董 1994a］。確かに聖書無謬説をとり，カリスマティックな指導者というような共通性も見出せるが，当教派では聖霊充満をしないし，他のペンテコステ教派とのつながりもないので，福音派としたほうが良いと思われる。
[23] 台湾における宗教の研究は膨大で霊的な志向性を述べたものは少なくないが，最近では五十嵐真子［五十嵐 2006］が現代的な展開を含めてよくまとめている。
[24] 報道によれば韓国のキリスト教が海外に派遣している宣教師の数は 2006 年の 1 年間で 173 カ国，約 1 万 7000 名で，アメリカに続いて世界 2 位である（東京新聞 2007 年 8 月 31 日ほか）。

参考文献

日本語文献

五十嵐真子　2006　『現代台湾宗教の諸相—台湾漢族に関する文化人類学的研究—』人文書院

井川直樹　1936　『バアクレイ博士の面影』基督教真理社

池上良正　1991　『悪霊と聖霊の舞台—沖縄の民衆キリスト教にみる救済世界』どうぶつ社

———　1999　『民間巫者信仰の研究—宗教学の視点から—』未来社

———　2006　『近代日本の民衆キリスト教—初期ホーリネスの宗教学的研

究―』東北大学出版会
石井美保　2007 「聖霊の贈与―ガーナ南部のカリスマ派独立教会における癒しの儀式と女性―」『一橋社会科学』第3号
伊藤　潔　1993 『台湾』中公新書
井上伊之助　1960 『台湾山地伝道記』（会員限定版）井上伊之助先生著書刊行会
伊能嘉矩　1928 (1994) 『台湾文化志』刀江書院（南天書局）
伊谷隆一　1967 『非戦の思想』紀伊国屋
――――　1971 『評論集　回帰と憂憤のはて』国文社
戒能信生　1984 「日本教会の台湾伝道の歴史」日本基督教団台湾関係委員会編『共に悩み共に喜ぶ―日本基督教団と台湾基督長老教会の協約締結のために―』日本基督教団
片岡　樹　2007 『タイ山地―神教徒の民族誌：キリスト教ラフの国家・民族・文化―』風響社
加藤　実　1984 「山地教会の受難を生きた人々」日本基督教団台湾関係委員会（編）『共に悩み共に喜ぶ―日本基督教団と台湾基督長老教会の協約締結のために―』日本基督教団
岸本羊一　1984 「井上伊之助と台湾高山族伝道」日本基督教団台湾関係委員会（編）『共に悩み共に喜ぶ―日本基督教団と台湾基督長老教会の協約締結のために―』日本基督教団
高　俊明　1967 「台湾の近代化とキリスト教」『アジア文化研究』4号
高　俊明ほか　1982 『台湾基督長老教会説教集』教文館
駒込　武　2005 「台湾史をめぐる旅 (2) 台湾基督長老教会の人びと」『前夜．第1期』2号
阪口直樹　2002 『戦前同志社の台湾留学生―キリスト教国際主義の源流をたどる―』白帝社
坂本　進　1988 「台湾山地同胞（旧台湾高砂族）とキリスト教」『宗教研究』第62巻3号
櫻井徳太郎　1982 『日本民俗宗教論』春秋社
佐々木宏幹　1995 『宗教人類学』講談社学術文庫
杉本良男（編）　2002 『福音と文明化の人類学的研究』（国立民族学博物館　調査報告31）国立民族学博物館
――――（編）　2006 『キリスト教と文明化の人類学的研究』（国立民族学博物館調査報告62）国立民族学博物館
須田清基　1996 『21世紀の世界へ捧ぐ』（須田献東（編））私家版
曾　景来　1939 (1995) 『台湾宗教と迷信陋習』台湾宗教研究会（南天書局）

戴　國煇　1988 『台湾』岩波新書
台湾総督府編　1919 (1993) 『台湾宗教調査報告書　第1巻』台湾総督府（捷幼出版社）
高井ヘラー由紀　2005 「日本統治下台湾における台日プロテスタント教会の「合同」問題―1930年代および1940年代を中心に―」『キリスト教史学』59号
――――　2005b 「植民地支配，キリスト教，そして異文化交流―日本軍による台湾武力制圧における事例より（1895年）（特集 近代東アジア文化とプロテスタント宣教師―その研究と展望）」『日本研究』30号
高橋晋一　1997 『台湾　美麗島の人と暮らし再発見』三修社
田島一郎　1971 「須田清基―軍籍を離脱したキリスト者―」『思想の科学』119号別冊4
鄭　児玉　1981 「台湾のキリスト教」『アジア・キリスト教史(1)―中国，台湾，韓国，日本―』教文館
鄭　仰恩　1999 「世紀の転換期における台湾キリスト教の歴史評論」『基督教研究』61巻2号
寺田喜朗・塚田穂高　2007 「教団類型論再考―新宗教運動の類型論と運動論の架橋のための一試論―」『白山人類学』10号
中林伸浩　1979 「独立教会について―西ケニア・イスハ族の場合」『アフリカ研究』18号
――――　1994 「アフリカ独立教会の聖霊」『金沢大学教養部論集　人文科学篇』第32巻第1号
日本基督教団台湾関係委員会（編）　1982 『台湾基督長老教会の歴史と苦難』日本基督教団台湾関係委員会
――――　1984 『共に悩み共に喜ぶ―日本基督教団と台湾基督長老教会の協約締結のために―』日本基督教団
日本真耶蘇教会本部（編）　1943 『真耶蘇教会要論』日本真耶蘇教会本部
萩原俊彦　2000 『近代日本のキリスト者研究』耕文社
原　英子　1998 「民族と言語」若林正丈編『もっと知りたい台湾』（第2版）弘文堂
東のぞみ　2004 「台湾における原住民教会の歴史と『原住民神學』の形成―台湾基督長老教会と日本基督教団との宣教協約の視点から―」『神學研究』51号
藤野陽平　2005a 「癒しの民俗宗教としての台湾キリスト教―真耶蘇教会を事例として―」『日本台湾学会報』第7号
――――　2005b 「病いの災因論から健康の福因論へ―スピリチュアリティから

みる民俗的健康観—」『人間と社会の探求（慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要)』第60号
——— 2006 「台湾のキリスト教にみるスピリットとスピリチュアリティ」『アジア遊学』(特集アジアのスピリチュアリティ—精神的基層を求めて）第84号，勉誠出版
古家信平 1999 『台湾漢人社会における民間信仰の研究』東京堂出版
マリンズ，マーク・R. 2005 『メイド・イン・ジャパンのキリスト教』(高崎恵訳）トランスビュー Mullins, Mark., *Christianity Made in JAPAN.* Hawaii, University of Hawaii Press, 1998.
増田福太郎 1939 (1996) 『台湾の宗教』養賢堂（南天書局）
水野 誠 1988 「普世的（エキユメニカル）であるとともに郷土の民と1つ—台湾基督長老教会信仰告白の日文訳について—」『基督教論集』31号
森山昭郎 1992 「日本統治下台湾のキリスト教」『東京女子大学比較文化研究所紀要』53号
三尾裕子 1990 「〈鬼〉から〈神〉へ—台湾漢人の王爺信仰について—」『民族学研究』第55巻3号
山本澄子 1972 『中国キリスト教史研究』近代中国研究委員会
山本禮子 1997 「植民地末期における台湾キリスト教主義学校の相剋」『アジア文化研究』4号
——— 1998-1999 「台湾の高等女学校研究：インタビューにみる女学生生活とその背景（その一）（その二)」『和洋女子大学紀要．文系編』第38巻39号
——— 2000 「植民地末期におけるキリスト教主義学校の相克—淡水中学・女学校について」『天理台湾学会年報』9号
渡邊欣雄 1991 『漢民族の宗教—社会人類学的研究—』第一書房
『聖書（口語訳)』日本聖書協会，1954

中国語文献

会史編輯委員会 1989 『台湾聖教会会史』基督教台湾聖教会
顔 家俊 2002 「十字架上的真理」李世偉等『台湾宗教閲覧』博揚文化
魏 以撒(主編） 1947 『真耶穌教会創立三十週年紀念専刊』真耶穌教会総会
魏 外揚 1996 「基督教在台早期的医療宣教」林治平主編『基督教與台湾』宇宙光
査 時傑 1996 「四十年来的台湾基督教会」林治平主編『基督教與台湾』宇宙光
蔡 應時 1969 『真耶穌教会在台湾之成長』(台湾浸信宣道会神学院，聖経文学

士併神学士畢業論文）
徐　麗慧　1996「教会医療在台湾」林治平主編『基督教與台湾』宇宙光
真耶蘇教会台湾総会　1976『真耶蘇教会台湾伝教五十週年紀念刊』真耶蘇教会台湾書報社
――――　1996『真耶蘇教会台湾伝教七十周年紀念刊』真耶蘇教会台湾総会
真耶蘇教会台湾総会編審委員会　1986『真耶蘇教会台湾伝教六十週年紀念刊』棕樹出版社
北部台湾基督長老教会史蹟委員会（著），1997『北部台湾基督長老教会的歴史』（陳宏文訳）人光出版社
台湾基督教新聞社　1958『台湾基督教大鑑（上冊）』台湾基督教新聞社
台湾基督教長老教会総会歴史委員会　1965『台湾基督長老教会百年史』（基督教在台湾宣教百週年紀念叢書）台湾基督長老教会
中華民国内政部編印　1991『宗教簡介』中華民国内政部
陳　碧琦　1975『台湾聖教会的成長』（台湾中台神学院，神学士畢業論文）
陳　玲蓉　1992『日據時期神道統制下的台湾宗教政策』自立晩報
董　顕光　1962『基督教在台湾的発展』私家版
董　芳苑　1994a『宗教與文化』人光出版社
――――　1994b『信仰與習俗』人光出版社
楊　森富　1968『中国基督教史』台湾商務印書館
李　桂玲（編）　1996『台港澳宗教概況』東方出版社
李　政隆　2001『台湾基督教史』天恩出版社
林　金水（主編）　2003『台湾基督教史』九州出版社
林　治平（主編）　1996『基督教與台湾』宇宙光
No Name　1997『李常受弟兄記念専輯』台湾福音書房

英語文献

Bolton, Robert J. 1976 *Treasure Island: Church Growth Among Taiwan's Urban Minnan Chinese*, W. Carrey Library
MacInnis, Donald E. (ed.) 1956 *The Taiwan Christian Yearbook: A Survey of The Christian Movement in Taiwan during 1956*, China Sunday School Association
Rubinstein, Murray A. 1991 *The Protestant Community on Modern Taiwan: Mission, Seminary, and Church*, M. E. Sharpe, Inc.
――――　1996 "Holy Spirit Taiwan: Pentecostal and Charismatic Christianity in the Republic of China" Bays, Daniel H. (ed.) *Christianity in China:*

From the Eighteenth Century to the Present, California: Stanford University Press

The Government Information Office (ROC) 2005 *Taiwan Yearbook 2005*, The Government Information Office (ROC)

参考 URL（いずれも 2007 年 11 月現在）

外務省，各国・地域情勢，台湾　http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/taiwan/data.html

真耶蘇教会台湾総会　http://www.tjc.org.tw/

台湾区衆召会　http://www.recovery.org.tw/

台湾基督長老教会　http://www.pct.org.tw/index.htm

台灣基督教會教勢報告　http://www.ccea.org.tw/church/adlink/statics/about1.htm

ジャパン・ゴスペル・ワーク　http://www.jgw.or.jp/

JGW 日本福音書房　http://www.jgbr.com/

今の時代における神聖な啓示の先見者ウォッチマン・ニー　http://www.watchman-nee.jp/

中華民国内政部民政司　http://www.moi.gov.tw/dca/religion01.asp